

## 私のシベリア抑留体験記

栃木県 野沢 功

戦前満州チチハル関東軍軍馬補充部隊に服務中、昭和二十（一九四五）年八月十五日終戦となりました。

関東軍命令にて全員武装解除となる。内地帰還に列車配備の都合とか二週間の自由待機を命ぜられる。旧関東軍の弾薬庫を仮住居に。その間内地帰還に先立ち作業大隊が編成される。一個大隊千五百人と記憶する。九月四日早朝、内地帰還のことにてソ軍警戒兵に守られ目的の乗車駅まで二十キロの行軍となる。その懐かしのチチハルを行進中、市街地の道端に日本移民団が立ち並び、老若男女が兵隊さん元気でなあ、と涙を流す光景は歴史的な事である。各自雑囊より取り出した乾パンに氷砂糖を手渡す。最後の別れとなる。さらばチチハルよ。一団は無言のまま一路目的地に、そ

して到着した付近には満人の寒村部落で線路があるだけ。先発部隊の置き土産であろう紙屑その他が散乱してある。そんな少ない部落の周辺にて小さな本を収得する、日露会話辞典と書いてある。

発売元は大連市〇〇と書いてある。別に貴重ではないが、暇つぶしのつもりで目を通す。日本語とソ連語で解り易く書いてある単語であり、関東軍はソ連行きが決まっていたと思う。そしてソ連将校と日本人通訳の話にて待機中のソ連の有蓋貨車にと乗車する。行先はナホトカと話す。薄汚い、家畜の臭いがする二段式板張りで、車内は日中でも真暗で一両当たり約六十人で、中間の床板に生理用の穴をあけてあり、席の都合で枕元が便所となる家畜運搬車であり、各車両の出入口扉には嚴重な錠がかけられ、列車の前または中間、後部等連絡用の有線が張られ、自動小銃を手にしたソ連警戒兵が目を光らせており、車内は静かで、夜半と思う、シベリア本線とナホトカ線の交差する駅で全員緊張の一時である。仲間の一人がシベリア

行きだと叫ぶ、騒然とした車内、しばらくして静かになる。誰彼という事でなく、身の保障すらないシベリアで重労働。生きて祖国に帰る望みは絶望という思いを各自が心の内に決めた事と思う。

列車は不定期のため時折り駅の引込線にて待機する事もしばしばである。出発以来日数もかかったと思う。バイカル湖の端で飯盒炊飯など？シベリア本線を驀進シクラスノヤルスクという大きな駅に停車、全員下車し長時間待機する。支線に乗換えて終着駅がアバカン地区チャイナゴールスカヤである。駅は名ばかりの寒村殺風景、鉄道の線路だけが何本も敷設され両端には野積みされた石炭の山である。石炭の粉が降り掛かる中を全員徒歩にて収容所まで行軍である。正門前に整列、収容所長の訓示があり、第一声に、諸君に上司の命令を伝達する。諸君は日本政府賠償の肩代わりとしてモスクワよりの帰国命令があるまでソ連国復興のためこの地、炭坑で増産に励んでもらいたいと訓示があり、そして刑務所の宿舎に部屋割りなど

十畳に二十四人、一畳に二人三段式ベッドである上段のもの、あぐらをかいて天井に頭がつかえる始末です。休養などの暇もなく全員身体検査を行う。

各々等級がつけられ、一級二級三級に分けられる。私は文句なく一級で、炭坑で地下作業となり採炭夫である。夢にも見たこともなき地獄の底である。入坑後何カ月が経ち、風呂にも入れず目と歯だけが白く汗と埃にまみれし姿、この世のものと思われず、せめて腹いっぱい黒パンを食べられたら作業も思うようにできるのだが、人間の本能と申すか、食べるもの以外に頭が働かず捕虜ボケとでも言うか、別にノルマだとかパーセントだのという前に大きなスコップに石炭を山盛り入れて八時間みっちり働かされる監督の目を盗んでスコップを抱き横になる。その後見つかるどダワイビステリーと大きな声で怒鳴られる。腹の虫がうなり、目の前を大きな黒パンが行ったり来たり夢でも見ているようである。三カ月ごとに坑内と地上

の作業が交替となる。地上は石炭の入ったトロツ  
コを押す作業である。途中で休む事もできない。  
後続車のため停滞してしまうからだ。

外の作業は太陽の光が当たるとくらいで腹は減る  
し力が出ない。時折り力を入れて押す坂道で力ん  
だはずみに出るのは屁ばかりである。

一次の作業が終り、疲れた体に鞭打つて宿舎に、  
そして横になる。夜半睡眠中に時折りソ軍の警戒  
兵に経理将校通訳が来て引込線に無蓋貨車が入っ  
たので使役に出るようにとの事で、ねぼけまなざ  
しで夜空を見つめ、そんな一時、監督にダワイの  
声が掛けられる。六十トンの貨車に四人で石炭を  
積み込む作業である。朝方になる事もしばしばあ  
る。そして朝方炭坑に出勤となるなど抑留の身で  
いたしかたない。

そんなある日（昭和二十二年の冬と思う）收容  
所内の技能者を調査すると言う。約三百人の人が  
クラスノヤルスク機関車工場に転送となる。私も  
配管工でしたので一緒に行動する事になり、機関

車の組み立てボイラーの取り付け作業である。

精いっぱい労働、色々な出来事もあったが最  
終ダモイに組することができ、昭和二十三年八月  
懐かしのナホトカを目指す事になった。厳しい共  
産党の教育に油を絞られ、無事引揚船を港で眺め  
る、涙がポロポロと止めどもなく。ソ連国と日本  
政府役人立会いで帳簿による照合にて乗船となる。  
船内で船員一同による歓迎に感謝する。抑留三年  
間酷使され、解放された間は一時夢遊病者のよう  
であつた。

舞鶴港に上陸し、召集以来七年二カ月ぶりで日  
本量に腰を下ろすことになる。夢にまで見た故郷  
に帰り、家は以前と変わらぬ貧乏暮らし、遊ん  
でもおれず、田畑とて無く、職なく職を求めて東  
京へ。シベリアの苦労を元に死んだつもりで働い  
たらどんな答えが出るかとただただ黙々と働いた  
結果、捨てる神あり救う神とやら。得意先に大学  
病院があり、時折り修繕にその他に出身した。

上司の方や他の方々に認められ就職となる。仕

事は黙々と実行、感謝の気持ちで精を出す。在職中に業務功労者として文部大臣表彰を受賞した。そして今日、全抑協のお手伝いができるのも大学のご恩があった事と老後の幸せに感謝し、あわせて異国の地に永遠に眠る友の冥福を祈り、私のシベリア抑留体験記を終わります。

## シベリア強制抑留記

千葉県 菅谷 一雄

### 【執筆者の紹介】

現住所 栃木県小山市大字島田岸

兵歴 昭和十六年七月十六日 東部三十六部隊

隊

終戦時 満州滝江省チチハル 満州関東軍軍属

補充馬部隊

陸軍上等兵 チチハル 満州里を経て

入ソ

復員 昭和二十三年八月ナホトカ經由舞鶴港

復員後 大学職員管理営繕課主任

現在 退職後小山支部地区役員

(栃木県 野沢 芳夫)

私は昭和二十(一九四五)年八月十五日終戦を中国東北部(満州孫吳)で迎えました。

兵役は昭和十九年十一月二十三日陸軍通信兵として神奈川県東部七十八電信隊に入隊する。

直に関釜連絡船にて満州新京(長春)七五八〇部隊初年兵教育に入る。三カ月で一期の教育終る。四月の上旬チチハルに転勤、実働に入る。次に孫吳軍通信七五八四固定無線隊に転勤、この地が終戦までの居住地となる。

一方戦局の方は日を追って悪化しており、ここ満州は比較的平穏であった王道楽土も束の間、二十年八月九日ソ連軍の不法進入空襲有り、軍の施設爆破されるも応戦する武器もなく、さすが関東軍といえどもなす術もなく、ソ連軍の侵攻一方面的であった。十五日玉音放送により終戦となる。国